

---

# 獣の王者 『世界を旅する・アセリア編』

天狐

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

獣の王者『世界を旅する・アセリア編』

### 【Nコード】

N4324V

### 【作者名】

天狐

### 【あらすじ】

『紅き翼』の白風<sup>はくふう</sup>としての戦いは終えて、新たな名と身で世界を旅に出た主人公。

新たな名『シユヴァルツェ』と名乗り新世界を旅をしている中、急に訪れた異界に繋がる『門』<sup>ゲート</sup>に吸い込まれ別世界へと飛ばされてしまった。吸い込まれ、目を覚ましたら見知らぬ森の中。何処に飛ばされたのかと検討していると色鮮やかな美女や美少女たちが現れた。

その少女からは妙な力を持った武器を持っていた。

主人公はその『武器』を知っていた。そして、その『武器』を扱える種族も知っていた。  
彼女等は『スピリット』たちだと・・・。

この作品は【獣の王者』世界を旅する』】の番外編です。

## 001話(前書き)

長らくお待たせしました。

【獣の王者』世界を旅する』の番外編。

獣の王者』世界を旅する・アセリア編』です。

両作品、頑張つて投稿したいと思いますので応援宜しくお願いします。

誤字脱字があるかもしれませんので注意して下さい。

## 001話

現在、帝国に居たテオドラと別れ世界各地を旅をしている。

時には暴走した竜種を鎮圧したり、不法密猟者を撃退したり、人身売買を行う組織を潰したり。

まっ色々としていた訳だ。

今日も今日である村にワーウルフの群れが襲っていたので撃退した。ワーウルフは戦闘能力はぼちぼちだが機動性と集団でのコンビネーションの狩が強みだ。

一匹一匹では大した事は無いのだが集団で来られたら厄介な相手だ。まっ俺も早々負ける事は無いので袋叩きしてきたワーウルフを一匹残さずブツ飛ばしたが……。

「ふあっあああ……寝るか」

現在は夜で近くの小川の傍で野宿する事になった。

次の町まで徒歩で数日は掛かるだろう。

パチパチと燃えて軋む木の音を子守唄代わりにしてウトウトと眠りだす。

もう意識が落ちる寸前、妙な魔力に気が付いた。

「何だ……コレ？」

深い眠りへと誘い掛けていた意識が徐々に戻りだし視線だけ周囲を見渡す。

妙な魔力は何処か彼処に感じられ場所が定まらず感じたり消えたりを繰り返していた。

流石にコレは不思議だと思ひ木に掛けていたAMRを握り締める。その妙な魔力は徐々にだが俺の傍に近付いて来るのが判った。

敵か？

それとも野生のモンスターか？

推測しながら何時でも戦える準備を取り掛かる。

やがて肉眼でも捕らえられる距離にまで感じ出したが、一向にソレらしき物は見当たらない。

しかし魔力は確かに俺の近くに感じる。

「埒が明かないな」

このまま埒が明かないと判断した俺はこの場を離れる事にした。

AMRを杖にしながらか立ち上がり浮遊術で宙に浮かぼうとした瞬間、魔力が膨張して巨大化した。

その魔力の量が半端なく軽くナギすらも超えていた。

これには流石の俺も驚きを隠せずに急いで離れようとした。

その為か足元に発生した黒い渦に俺は気付けなかった。

「なにっ!？」

重力を数倍にした様な錯覚が覚える程の引っ張る力を感じた。

浮遊術で浮くはずの俺は黒い渦に引っ張られ浮く所か下に吸い込まれていた。

急いで魔力を強く使い浮遊術で浮かぼうとしたがタイミングが悪か

ったのか既に脱出不可能の状態に陥っていた。  
そして俺は黒い渦の中に吸い込まれてしまった。

最初に目を覚まし見たのは草木生茂る森の中だった。

空を見てみると太陽が昇っており位置から見て昼頃だろう。

そこで俺は可笑しいと思った。

確か俺は夜になったので野宿して寝る一歩手前だった筈だ。

だが現に周囲は明るく、どう見ても夜と言うには明るすぎた。

一体全体どうなっているのか判らず混乱している茂みの向こうから  
誰かの気配を感じた。

魔力も氣でもなかった為に少し反応するのが遅れてしまった。

俺は急いで迎撃できる体制になりながら気配がする茂みの奥を睨む。  
気配は複数、二桁行くか行かないかの数で徐々に、しかし確実に俺  
の方に向かっていているのが判る。

これはどう見ても偶然その道を歩いてる訳ではなく、目的を持つ  
て此方の方に歩いて来ている足取りだった。

手元の武器を確認する。

アンチマテリアルライフル

AMRである『バレットM82A1』一丁。

スタンダードモデルの『ブレンテン・フューチャー』一丁。

警察官などがメジャーとして使われる『ベレッタM92』一丁。

計三丁。

今持っている全ての武器を確認を終えた俺は身構える。

そして接触まで一步の所で茂みが動き、そこからわらわらと色鮮やか  
かな髪や瞳を持った絵本などに出て来る妖精みたいな女性が現れた。  
流星の俺もこんなに綺麗な女性が来るとは思っていなく呆然として  
しまう。

そんな事を露知らずの彼女らは何かボソボソと話し合っていた。  
訊き慣れない単語。

そして今気が付いたが彼女ら以外に妙な気配を発する。  
しかも、その気配には何処かで感じたことのある気配だった。

最近、何処かで感じた気配に過去の記憶を貪り出そうと脳内を駆け  
巡る。

そして思い出した。

これは

「永遠神剣（ボソッ）」

俺の本契約のアーティファクトである永遠神剣と同じ気配を感じた。  
そして、その気配のする場所が目の前に居る彼女らの手に収められ  
ている武器だった。

永遠神剣を持ち、妖精の様に色鮮やかな麗しき可憐な女性など俺の  
知っている限り一つの種族しか知らない。

彼女らは『妖精<sup>スプリット</sup>』だ。

しかし、そもそも何で彼女らと接触しているのか今一判らないが一  
様は銃口を彼女らに向けとく。

何かの拍子で戦闘でもされたら距離的には少しヤバイ。

接近戦用の武器が俺に一切ない・・・いや、裏ワザを使えばそこそ  
こ戦えるが長時間は無理だ。

「

「

何か親しげに話し掛けてくる彼女らだが、残念なことに言葉が通じないのだ。

一樣は理解しようよ頑張ってみるものの頂垂れる結果に終えてしまった。

すると燃上がる炎の様な髪と瞳を持った女性が一步前に出て手を差し伸べてきた。

これには俺も驚きながらどうしたら良いか思考する。

このまま彼女の手を取ったら何処に連れられるか判らない。

そもそもだ。ココが何処の世界なのか判らない。

最初に浮かび上がる世界と言ったら『永遠のアセリア』であるファンタズマゴリアぐらいだ。

だが、それが絶対に当たっている保障もない。

しかしココで手間取っても仕方ない。

一緒に付いて行く事にした。

だが　これで俺が運命と言う大きな渦に吸い込まれている事など、この時の俺は知る余地も無かった。

## 002話(前書き)

少し色々としてまして投稿が遅れました。  
頑張っていていきますので宜しく願います。  
誤字脱字には注意して下さい。

## 002話

今現在。

何かトレインハートネット風の男性が拳銃を俺に構え、俺も呼応するかの如く二挺拳銃を構える。

殺伐とした雰囲気醸し出す互い。

でも、場所が謁見の間で女王様が見ている。

何でこうなったのか・・・それは数分前のことだ。

彼女等スピリット達と共に行動しているとアル場所に連れられた。それは中世風のお城で、正門なのだろう大きな門の前に到着した。ココまで来る間、周囲の居た彼女等は何かピリピリした感じで俺を監視していた。

少し居心地は悪かった。

つで彼女等は門番兵らしき人物と話していた。

「

「

「相変わらず何言ってるのか判らねえ・・・」

ぼやく俺を華麗にスルーする彼女等スピリットたち。  
兎に角、会話だけでも何とかしたいのだが……。  
うんっ？

「  
」

何か急に俺の前にスピリットの一人が手を差し出してきた。  
少し沈黙の間が出来て俺は

「んっ」

何となく握手を試みる。

だが、手を振り払われ相手は不愉快の表情をしていた。

どうやら違ったらしい。

ならば何の手だコレは？

するとお隣さんの2人のスピリットが何かを貸した。

えっと、緑の姉ちゃん手を差し出す。

それに合わせて赤の嬢ちゃんが自身の神剣である双剣を緑の姉ちゃんに渡す。

・・・即ち。

「武器を渡せって言ってるのか」

つてかジェスチャー上手いな。

そう思いながらホルスターに仕舞っている二挺の拳銃を渡す。

渡した拳銃を半ば強引に奪う感じで受け取りピッとそっぽ向かれた。

あれ？

何か険悪な雰囲気なんだけど何故？

「うおっ？」

何故、険悪になってるか判らなく混乱していると急に背後から引張られる。

急な事だったので少し怯んでしまいが体制を立て直して後ろを振り向く。

そこには蒼い髪の少女がAMRを引張っていた。

はいはい、コレもですね。

AMRを少女に渡す。流石に重かったのか少しよろめきながらも受け取る。

……頼むから落とすなよ？

高かったんだから。

つで、無装備状態で彼女等スピリットの後を追う。

その際に擦れ違う人間に凄く睨まれた。何か汚物を見る感じで。

はてはて……ココはアセリアの世界なのかねえ？

スピリット達を見た感じラキオスではないな……ならば別の王国？

しかし、この世界がアセリアの世界だとは限らない。

うう……困った八方塞だ。

そんな事を思考しているとある広間に出た。

感じからして王様との謁見する場所だろう。

現に少し上を向くと王座たしき場所があって女が座っている。

「  
」

「  
」

俺を謁見の間に連れてきた彼女等スピリットはその場で跪き頭を下げる。

女・・・いや女王だろう彼女は何か淡々と言葉を発する。

その後、彼女等スピリットはそそくさと角の方へと下がった。

ある程度、予想は出来た。

彼女等はエトランジェ（仮）である俺を王様の前まで連れて来るのが役目だったようだ。

でもさ・・・。

「  
、  
」

「はあ〜・・・」

話が出来ないってえーの。

何か言ってるのだろう女王の話聞くが、やっぱり判らない。

すると背後から何かの気配を感じた。

謁見の間と廊下を繋げる大きな門がゆっくりと開き一人の青年が入ってきた。

その青年からも永遠神剣の気配を感じる。

悠人でも光陰でもなさそうだ。

「あんだ、俺の言葉わかるか？」

「おっ、やっとまともに会話ができる」

もう流石に意味判らん単語で乱立させた会話は懲り懲りなんだな。俺は女王に背を向けて青年の方を向く。さて、どうやって情報を聞き出すか。

「まず互いに自己紹介しないか？」

「賛成だ。お前や貴様って言っていると判らなくなりそうだしな」

「俺は橋たかはな煉れんだ。宜しく」

「自分はシュヴァルツェ。ルツェと呼んでくれ」

「判った。ルツェって呼ぶぜ？」

「構わない。自分もレンと呼ぶ」

見た感じトレインに少し似ているし名前からして日本人だろう。性格も何かトレイン似してそうで何か怖い。さて、この人物は普通の人間か、それとも特別な人間なのか。色々判断に困るんだよな。

「今の状況を説明してくれないかレン？」

「良いぜ。ココはイスペリアって国で、ルツエの後ろの王座に座っているのがココの国の女王様『アズマリア・イズ・イスペリア』だ」

「やっぱり女王だったか」

首だけを後ろに向けて女王様を試してみる。

確かに威厳はあるな。

でも、ココで疑問に思った。

確かファンタズマゴリアにはエトランジェと契約出来る神剣は四神剣の『求め』『誓い』『因果』『空虚』だけの筈。

更にイスペリアにエトランジェが召喚される話など一度たりとも聞いたことが無かった。

だが現にレンから神剣の気配がピンピンと感じるからエトランジェで間違いないだろう。

はて、本当にどうなるやら。

以前、神様（亡）の手違いで一度だけ来た事があるが……。

はあ〜〜前途多難だな〜。

今、溜息を漏らしながら不安な表情を見せる女性。

名はシュヴァルツェ。略してルツェと名乗っている。

しかし、異世界に飛んで来たって言うのに以外にも冷静だな。いや、俺も人の事は言えないんだが……。

『主様、少し宜しいですか？』

『どうした断罪？』

急に俺の頭の中に響く女性の声。

ルツェに向いていた視線を右足に装備しているホルスターに仕舞っている拳銃に向ける。

こいつは俺の永遠神剣。位は四位、名は『断罪』。

性格は御淑やか落ち着きのある性格だ。

断罪から話し掛けてくるのは珍しく、少し驚いている。

『私の気のせいじゃなければ……ルツェさんから神剣の気配がしません』

『なにッ!?!』

断罪に話し掛けられた事にも驚いたが、それすら上回る事に更に驚く。

普通、エトランジエって言うのは永遠神剣に選ばれた者の事だろ？  
じゃあ何でルツエには神剣が無いんだ？

『判りません。しかし、神剣を持っておらず手違いで異世界に呼ばれてしまったのかも知れません』

『マジかよ……』

ならルツエは今、非常に危険な立場だ。

この世界は永遠神剣を持った女性・スピリットが人間達に代わって戦争の代理をしている。

そして、そのスピリットを上回る能力を持った存在が俺達・エトランジエだ。

しかし、それは永遠神剣と言う圧倒的な《力》を持った武器を持っているからだ。

持っていないエトランジエなんかスピリットにすら勝てずに殺される。

『どっつするんだよ……』

『・・・変ですね』

知り合ったって言うのに即行、厄介事に成っている事に項垂れてい  
ると断罪が声を漏らした。

何か不思議そうな声を漏らしたので俺も少し気になった。

『何かあつたか？』

『ルツエさんからマナなどや神剣の気配はありませんが、別の何か  
を感じます』

『別の？』

『はい。しかも、その気配は私達、永遠神剣にも劣らない《力》で  
す』

『・・・』

断罪が言うのだから間違いは無いだろう。

アズマリアも俺の存在は想定外と言っていた。

ならばルツエも別の要素での例外なのかもしれない・・・。

ココでウジウジと考えてもキリが無いな。

手っ取り早くいくか。

「アズマリア!!」

「何ですかレイ？」

断罪に向けていた視線を王座で座っているココの女王であるアズマリアに向ける。

アズマリアは急な呼び掛けにも驚く事無く平然と応える。  
流石は女王。どんなことでも冷静沈着である。

「コイツと少し模擬戦をしたいが構わないか？」

「模擬戦ですか？」

「ああ、少し気になることがあってない」

「・・・・・・・・」

顎に手を当てて少し思考するアズマリア。

やっぱり急な模擬戦に流石のアズマリアも少し戸惑っている。  
考えること十数秒後。顎に当てていた手を戻し視線を俺に向ける。

「判りました。断罪のレイ、このエトランジェとの模擬戦を認めます」

「悪いな」

女王様からの許可は下りた。  
次はルツエと話さないとな。

「なあルツエ」

「んっ？」

「悪いが模擬戦してくれないか？」

「……………」

アズマリアに向けた視線を戻してルツエを見る。

そして俺の模擬戦をしてくれないかと聞いてみるとルツエは目を細めて見詰返してきた。

その目で一瞬でわかった。こいつ 相当の実力者だ っと。

「模擬戦は良いんだが武器を返してくれないか？」

「そうだったな。おい、こいつの武器を返してやれ」

「ハッ！！」

俺の言葉と同時に返事を返す一人のスピリット。

そのスピリットは三つの銃をルツエの元を持っていく。  
つてかアレって対物ライフルじゃないか？

一番大きい銃を見て俺は驚いた。

ルツエはAMRを以外の二挺の銃を受け取り俺に向く。

「その銃は使わないのか？」

「今回はね」

「そうか」

銃をルツエに持って来たスピリットは一度頭を下げて、AMRだけを持って角に避難した。

さて、緑のスピリットたちは人間や建物に被害が及ばないように周囲に待機している。

これなら心置きなく戦えるな。

俺は断罪を取り出しルツエに向ける。  
ルツエも二挺の拳銃を俺に向けてくる。

「いくぞ!!」

「来いッ!!」

そして互いの引き金トリガーと同時に模擬戦が開始された。

## 《イースペリア王宮・謁見の間》

一番最初に動いたのはレンだった。呼吸と呼応するかの如く彼の永遠神剣である断罪にマナから変化されたオーラフォトンが掻き集まる。

掻き集められたオーラフォトンは圧縮・固定され断罪にリロードされた。

断罪の銃口をルツエに向けて引き金を引く。トリガー

引かれた同時に銃口から圧縮固定されたオーラフォトンの弾丸が放たれる。

しかも一発ではなく複数で、その複数の弾丸は直角起動を描きながらルツエの上下左右から襲う。

一発の弾丸ではなく複数だった為にルツエも驚いたのは一瞬、直ぐに対応した。

地を蹴り後ろに下がる。

だが、断罪から放たれた弾丸は後退するルツエの動きに合わせて軌道が自動修正される。

ルツエは左右の手に持っている二挺の拳銃を構え襲って来る弾丸に標準を合わせ引き金を引く。トリガー

ダダダダダダダダッ！！！！

まるでマシンガンに近い音を発しながら二挺銃を連射する。

一発。また一発とオーラフォトンの弾丸を叩き落すが直角軌道を描いている所為か中々当たらない。

落とし切れなかったオーラフォトンの弾丸は速度を落とす事無くルツエに襲う。

既に射撃範囲外に潜入している為、銃弾で落とす事は不可能。だが

「シュツ！」

銃把<sup>グリッブ</sup>から手を放し、銃身を掴みハンマーの要領で銃把<sup>グリッブ</sup>をオーラフトンの弾丸を叩き落とす。

流石にレンも予想外な対処方法に驚きも次の攻撃へと行動していた。ルツエがオーラフトンの弾丸を銃弾で叩き落して所為で煙が発生しており前方が確認しづらかった。

その煙を利用しながらルツエに接近する。

レンの神剣『断罪』の銃身に薄い白色の刃が展開されており、その刃の長さが約銃身の倍以上だった。

そして煙の中に見えた影ごと切り裂く。

「ッ!？」

だが手に切った手応えに無いことに気が付いたレンは、咄嗟に身を低くする。

その同時刻、レンの頭上に一筋の閃光が通り過ぎた。

煙の中から無傷のルツエが現れ二挺の銃口をレンに向け、レンも腰のホルスターに入れていたもう一丁の断罪を取り出し二挺の銃口をルツエに向ける。

そして、始まったのがゼロレンジに依る撃ち合いである。

本来なら拳銃に依る撃ち合いでは互いに距離はある程度いるものだが、しかし、彼等らはそんな常識を覆すが如くゼロ距離で撃ち合っていた。

ダダダダダダダダダダダダダダダダダッ！！！！！！！！  
カラカラカラカラカラカラカラカラッ！！！！！！！！  
銃声が謁見の間に響き渡り、空葉莢が2人の足元に散乱する。  
互いに拳銃を乱射するだけではなく肘・膝・蹴り・拳など体術も組  
み合わせており、既に普通の者が入れるレベルではなかった。  
その戦いは、戦っているより舞っていると表現しても差違えない程  
に無駄が無い。

「強つ……いつ……なっ！！」

「レンっ……こっ……そっ！！」

舞う舞う舞う。

銃声すらも可憐な音色に聞えるほどに短く長い撃ち合い。

だが、最初に銃弾を失ったのはルツエだった。

レンの神剣『断罪』には、そもそも弾丸など無かった。

オーラフォトン<sup>マガジン</sup>を圧縮固定した物質を弾丸代わりとして『断罪』が  
撃っているのだ。

それに引換、ルツエは弾丸には限りがあり弾倉<sup>マガジン</sup>を取り替えなければ  
成らない隙もある。

拳銃での撃ち合いでルツエがレンに勝てる要素は無かったのだ。

勿論、ルツエも勝てない事は百も承知の事だ。

カチッ！！

「ッ！！」

ルツエの弾丸が底を突く音が互いに聞えた。

その瞬間、レンは左手に持つている一丁の『断罪』を上投げる。急に拳銃が上に投げた事によりルツエの視線が自然と宙へと舞う拳銃に移ってしまう。

時間にしてコンマ一秒もないであろう隙を作り出しレンは、右手に残っている一丁の『断罪』の銃口をルツエの腹部に当てる。

腹部に銃口を押された感覚に気付いて視線を戻そうとするルツエ。だが、これもコンマ遅かった。

「行けッ!!!!!!」

ゼロレンジ・バースト

両手で銃把グリッブを持ち、引き金トリガーの引く音と同時に銃口から膨大な量のオーラフォトン圧縮固定弾が放たれる。

放たれた弾丸シールド 砲撃がルツエを包み込み、緑スピリットが展開していた障壁すら貫き城の城壁すらも貫通した。

その一撃で城が揺れ、周囲は少し混乱してしまう。

女王のアズマリアすらも少し困惑しながらも模擬戦を超えた戦いを見て再度、エトランジエの実力を再確認した。

一方、ゼロレンジで放った極太閃光をルツエに当てたレンは困っていた。

それは

「……（死んでないよな？）」

模擬戦だと言う事を完全に忘れてしまい本気で放ってしまった事に後悔するレン。  
もし、死んでしまったら色々とヤバイ状況にレンも気が気でなかった。

城壁すらも貫通させた砲撃は床すらも少し削っており砂煙が舞って視界が悪い。

モクモクも浮遊する砂煙。その砂煙がやっと薄れてきた時、その砂煙から1人の人影が見えた。

それを見たレンも周囲の観戦していた者達も驚く。

あの一撃、しかもゼロレンジで放った攻撃を受けて生きているだけでも驚きなのに立っているのだから更に驚く。

レンは宙に舞って落ちてきた相棒『断罪』の半身をキャッチして二挺の銃口を向ける。

「ッ!？」

砂煙から出てくる事を予想しながら人影を睨んでいると一瞬だが《眼》が見えた。

だが、その《眼》は唯の眼ではなかった。瞳孔が縦に裂けた獣の眼光だったのだ。

それを見たレンは底知れない恐怖を感じた。

自身もこの世界に来て間々無く、戦闘回数も他のスピリット達と比べれば少ないものだ。

この世界にエトランジェとして召喚されて以上、強くなければ死ぬのは明日なのかもしれないのだ。

そんな殺伐として中世の戦国世界に飛ばされたレンは死ぬ気で強くなつた。

努力は裏切られること無く、見る見るうちに強くなりイースペリア

の一二を争う位の実力は持っている。  
勿論、その程度で自惚れているつもりは無い。  
戦争にはハイロウを黒く染められ、意思無く戦う兵器として借り出されるスピリット達と何度も戦った。  
時には死ぬかもしれない目にも合った。  
でも

「（ココまで恐怖を感じたことは無いぞ!?!）」

危ない目にも、危険な目にも、死にかけた目にも合ったって言うのに一番の恐怖を感じたのが、あの《眼》だ。

《眼》の殺気だけじゃなく謁見の間全体に広がる圧力と言う名のプレッシャーがレンだけではなく、周囲の女王やスピリット達にも襲い掛かる。

ある者は気を失い。ある者は腰が砕けて倒れこんでしまう者も居る。

「ふう……危なかった」

ルツエの声が聞えた。

それと同時に全体に放っていたプレッシャーは失せ、少しだけの静寂の間が訪れた。

身に付けた衣服は多少はボロボロになり、服に付いた埃を払うルツエ。

体の所々に傷はあるものの重症に当て嵌まる傷口は見当たらない。

そのルツエの状態にレンは絶句する。

単純なオーラフォトンでの最大出力ではなかったとは言え、唯の軽

傷で済んでいる時点でルツエは化物だとレンは思った。  
永遠神剣を持っているなら話は別だが、ルツエは持っていない。

「アレ受けて、それだけしか受けてないのかよ？」

「そうか？ 久しぶりの重症だよ」

嘘付け。

そう言いたかったが何か肯定させる威圧を感じるレン。  
もず間違はなく即戦力なのは間違いないだろう。

レンは『断罪』を腰にあるホルスターに戻す。

ルツエも二挺の拳銃を両足にあるホルスターに仕舞う。

「・・・ルツエは即戦力だ。アズマリア・・・アズマリア？」

「・・・・・・・・」

視線を女王であるアズマリアに向けて話すレイだが、アズマリアの様子  
が可笑しい事に気付く。

よく見るとアズマリアは気を失っていた。

はあゝと溜息を漏らし頭を左右に振るレンだった。

## 004話

イースペリア謁見の間にて多少トラブルがあったものの無事に事は過ぎていった。

ルツエはスピリットに案内されながらスピリットの館である詰所に向かった。

レンはどうやら女王と話があるようで、女王と共に城に残った。

《イースペリア王城・とある廊下》

「

「だから判らないって」

相も変わらず一切会話が出来ないことに頂垂れるルツエ。

でも、このまま会話が出来ないのは色々とマズイので対策を考えるルツエはある事を思い出した。

それは自身の能力だ。

《ザ・ビースト獣王神》。

数多の世界の獣の能力が使える、獣化も可能の能力。

ならば、この世界も能力発動させる為の獣を選択は可能だろう。

一度、進ませていた足を止めて瞼を閉じる。

脳内で色々な星の数以上の獣のたましい情報を探り出すルツエ。

急に足を止めて瞳を閉じたルツエに気が付いた青スピは振向き話し掛ける。

だが思考の海にダイブしているルツエの耳には青スピの言葉は入らなかった。

「（永遠神剣・再生の子・言葉・会話・ファンタズマゴリア）<sup>スピリット</sup>」

数多の数が存在していた獣の数が減り、数個の獣が残った。その残った獣の一体を選び、部分開放する。

勿論、開放する部分は『聴覚』と『声音』で常時展開状態にする。すると今まで何を言っていたのか判らなかつた青スピの言語が判る様になつていた。

「エトランジエ様。聞えますかエトランジエ様!？」

「ああ聞えるよ」

「ッ!？」

ルツエが急に此方<sup>ファンタズマゴリア</sup>の聖ヨト語を話したことに驚く青スピ。それに引換えルツエは飄々とした態度で普通に接していた。

「あの、エトランジエ様。私のお言葉が判るのですか?」

「んつ。俺の言葉も判るよな？ でっ、先ほどお前が言った台詞は『あの、エオトランジェ様。私のお言葉が判るのですか？』・・・違つか？」

「いえ、間違いありません。・・・何故、急に会話が出来るようになったのですか？」

「・・・秘密で」

「ッ、はい」

何かに察したのか青スピは何も言わずに案内を続行した。ルツェも少し申し訳ないような顔をしながら案内する青スピの後を追う。

#### 《イースペリア王城・客間》

王城の内部の客間に使われる一室にレンとアズマリアが椅子に座り紅茶を飲んでいた。

謁見の間にてルツェと分かれたレンは、アズマリアの呼ばれココ客間に居た。

互いに紅茶を飲みながら険しい顔をしていた。

「まず、ルツエは即戦力だが厄介な者かもしれねえな」

「そうね」

王族とは言えど人間には違いないアズマリアですらも感じた何か圧倒的な《力》。

しかも、永遠神剣すら持つていない普通の人間が放った威圧ですらスピリット達は怯んでいた。

この事で判るよいにルツエは普通の 少なくとも永遠神剣所有者には戦える人間だと判った。だが、そこで問題が発生する。

あれ程の《力》を持った人間が果たして、我々の言う事を訊いてくれるかの問題なのだ。

レンから見て性格は悪くなかった。しかし、奥底に見える何かに最後まで信頼は出来なかった。

アズマリアは一層、信頼することは出来なくなっていた。

一瞬とは言えど、あの威圧を浴びてしまった以上は簡単には信頼できないでいた。

「まっ、少し俺が話してみる。そこでルツエの性格を確認してみるわ」

「はい。あつ後」

「判ってるって。ルツエがスピリットの事をどう思ってるかもだろ？」

「はい。もし彼女がスピリット達を良く思わなかったら・・・」

「・・・そうじゃなければ良いんだがな」

アズマリアは他の国々とは違いスピリットを大事にしている。

だが、一度染み付いた階級制度は中々落ちる事は無く、未だにスピリットを迫害する人間は後を絶たない。

それでもスピリットが住みやすく安心できる国を作るためにアズマリアは日々努力している。

レンは一々、スピリットだの人間だの区別せずに普通に接している。だが、ルツエはどうなのか？

スピリットをどう見ているのか？

アズマリアは、それが不安で仕方なかったのだ。

だからレンにさり気無く話をしてきて欲しかったのだ。

「まっ、ルツエなら大丈夫だろ。パッと見は普通の女ぼかったし」

「なら良いのですが・・・」

「アズマリアは心配しすぎなんだよ」

「貴方は少しは考えて行動して下さい」

「酷い言われ様だ」

苦笑しながらレンはヤレヤレと顔を左右に振る。

そんな苦笑するレンにアズマリアは冷えた紅茶を一口含んだ。  
持ち上げたカップを戻し、真剣な顔でレンに向けた。

「レン、あの噂は知っていますね？」

「ああ、同盟国のラキオス国の近くにマナ柱が出たそうだな？」

「はい」

マナ柱。

膨大なマナが柱状に天を貫いて現れる現象。

それはエトランジエ光臨の証だと言われている。

光臨の証でもあるマナ柱がラキオス周辺に現れたと言うことは《永遠神剣・求め》の契約者が現れたと言うことだ。

元々、エトランジエとして光臨する人数は四人で何処に呼ばれるか予想は出来たいた。

まず先ほど言ったラキオスには四神剣の内でも位が高い四位の神剣『求め』が所持されている。

次に五位の位を持つ『誓い』は最大の国土を持つサーギオス帝国が所持しており。

残りの五位『因果』と同じく五位『空虚』はマロリガン共和国が所有している。

本来ならレンはイースペリアに召喚されることは無かった。

四神剣とは別の永遠神剣を持ったレン、更には永遠神剣を持たなくともエトランジエと互角に戦えるエトランジエ。

謎が更に謎を産み続けていた。

#### 《スピリットの館・第二詰所》

城と下町から少し離れた林の中に館があり、その場所に案内されたルツエ。

その建物は簡単に言えば昭和の学校寮みたいな建築物。

確りと建てられた詰所の扉を案内してきたスピリットが開ける。

「どつぞ」

「んっ」

スピリットは何とも無愛想な言葉で詰所内部に入っていく。  
ルツエは何事も無かったかのように後を追い詰所に入る。  
リビングらしき場所に案内されると何人かのスピリットが居た。  
青が2人、赤2人、緑3人、黒1人。案内した子は青のスピリット  
なので青は計3人。  
計九人のスピリット達が待機していた。

「お初にお眼に掛かります。此処、第二詰所にまとめ役をしております  
まずフレエーン・ブルースピリットです」

1人の青スピが挨拶する。  
ショートヘアで身長も高く、どうやら年長者組でリーダー格らしい。  
次にフレエーンと名乗る青スピが前に列になって並んでいるスピリ  
ット達を紹介しだす。

「皆、エトランジエ様に挨拶を・・・粗相のないように」

別に気にしないのだが言っても聞かないだろうと思って何も言わない。  
ロングヘアの赤スピが一步前が出る。

「螢火のフレイ」

「・・・・・・・・」

えっと……。それだけ？

螢火つてのは神剣の名前で、フレイが彼女の名前。  
無表情無感情で挨拶して一步下がる。

本当にそれだけでルツエは反応に困ってしまう。  
すると隣で待機していたフレエーンが助言する。

「フレイは相手との触れ合いが苦手な子なので、お許しを……」

「別に気にしてない。少し戸惑ったけどね」

続いて二人の青スピが前に出る。

「アミア・ブルースピリットだよー！ よろしくねー！！」

「レムです。宜しく御願いますエトランジエ様」

短めのポニーテールで、見た目が小学生ぐらいの青スピであるアミアは元気良く大きく両手を振ってアピールしてくる。

そのアミアの後ろで少し隠れながら視線をチラチラさせながら挨拶する長めのツインテールで身長はアミアと変わらないぐらいの青スピであるアレム。

元気良く挨拶したものの行儀が悪かったのかフレエーンがアミアをキッと睨む。

それに恐怖したアルマは縮こまる。  
次に出てきたのは赤スピ1人と緑スピ1人。

「ミレルと言いますう。宜しく御願いますねえエトランジエ様」

「神剣『炎爆』を使いますアルマ・レットスピリットと言います。  
宜しく御願います」

フレーンと同じ長身でロングヘアの先を束ね、語尾を少し延ばしてほのぼのと挨拶する緑スピのミレル。  
一転してフレーンと同じ髪型で礼儀正しく挨拶する赤スピのアルマ。

2人は挨拶をした後、後ろに下がり他の2人が前に出た。

「・・・ゼクタアニです。これから宜しく」

「シュレニア・グリーンスピリットです・・・よっ宜しくお願います」

相手から見て右側に短いサイドポニーをピコピコを動かしながら、不機嫌な表情で睨んでくる緑スピのゼクタアニ。  
ショートカットした髪でフレイの後ろに隠れて怯えながら挨拶する緑スピのシュレニア。

つで最後に黒髪をゼクタアニの反対側にサイドポニーをした黒スピ。

「私はクーリイと言います。でも、気安く呼びかけないで」

露骨なまでのハッキリとした言葉をルツェに言い放つクーリイと名乗る黒スピの少女。

身長は皆と見比べたら中位だろう。

ココ（リビング）に入ってきてから、ずっと睨んでいて事には気が付いてたルツェはあえて無視した。

そもそも睨まれても無理も無いことだ。

彼女等は勝手に戦いの道具として扱われ、一生懸命に戦っても人間達には忌み嫌われる。

そんな環境下で急に入ってきた人間を好きになれる筈がなかった。

周囲の彼女等は予想していたのか余り驚いていた無かった。

つでルツェの隣に居たフレエーンがクーリイの前に進む。

フレエーンは手を振り上げ、そして

パシッ。

「ッ！」

「ッ!？」

誰もが予想した。叩かれる乾いた音がリビングに響くと。

しかし、リビングに響いた音は何かを掴む音だった。

クーリイの頬を叩こうと上げた手を振り下ろそうとしたフレエーン  
の横に一瞬で現れて腕を掴んだルツエ。

急に現れた事にリビングに居るスピリット達は驚いた。

「あの・・・エトランジエ様？」

「別に叩くことはない」

掴んでいたフレエーンの腕を放して皆に振向くルツエ。

「俺の事を気に入らない者は何人が居るようだが・・・嫌いなら嫌  
いで構わない。お前達の眼で見て俺の事を判断して決めればいい」

ルツエの放った言葉にスピリット達は驚いた。

本来なら格上の人には敬意を持って接するのだが、クーリイは拒絶  
の意思を見せた。

その態度にフレエーンは制裁をしようとしたが、それをルツエ自ら  
止めた。

これだけでも異常なのに、毛嫌いしていることを承知の上で「構わ  
ない」っと本人が言ったのだ。

流石に詰所に居る年長者組の者達は納得はいかなかった。

「エトランジエ様。ココでは上下関係はハッキリするべきかと」

「別にいいだろ」

「べつ別について」

いけしゃあしゃあと言葉を返すルツエ。それに面食らうフレインもともと、上下関係など一切気にしないルツエにして見れば、何故一々上下関係をハッキリさせねばならないのか判らなかつた。勿論、組織としての上下関係は判る。

しかし、彼女等は共に戦う仲間であり戦友でもありえるのだ。一々、上だの下だの気にしていたらキリがないのだ。

「さて、俺はシュヴァルツエだ。気楽にルツエと呼んでも構わない」

ルツエも軽く挨拶する。

イスペリアスピリット隊とのファーストコンタクトは上々に終わったルツエ。

これからどの様な事が起きるか。

それはルツエすらも判らない。

## 005話

レンとルツエのイレギュラー同士の模擬戦。

その模擬戦は引き分けと言う結果で終え、多少のトラブルがあったものの静かに幕は下りた。

レンはイースペリアの女王であるアズマリアに呼ばれ、ルツエとこれからの事を話し合い。

ルツエは第二詰所に居るスピリット隊との顔合わせを済ませた。

時刻は日が傾き始めた頃、アズマリアと分かれたレンは王城から出て第二詰所に向かっていた。

目的はルツエとはどのような人物なのか詳しく知る為に会話する為だ。流石に日が沈み出しているだけの事はあり、第二詰所に向かう為の林道は既に暗くなりだしていた。

まだ、行き慣れている訳でもないので急いで向かわないと迷ってしまう。

早歩きして数分後、やっと第二詰所が見えてきた。

うんっ？

「このまま行くのは少し普通過ぎるか？」

足を止めて思考を巡らせる、どうやったらインパクトがあるか考える。

……ピキッ!!

レンの頭上に通常では見ること適わない』!』マークが浮かび上がり、レンの口元は三日月型に歪んだ。

その眼は何か悪巧みを思いついた笑みだった。

「ふっふっふっ、これなら」

足先だけでトテトテと忍び寄り裏口に向かうレン。

第二詰所のスピリット達にバレないように移動して裏口に到着、扉を開いて忍び込む。

少し開く音が響くがリビングで集まりガヤガヤしている御蔭かバレずに入れた。

「えっと、ルツエの部屋はと……」

第一も第二の詰所も二階に部屋が全て用意されている。

なのでルツエも二階に居る筈。

スピリット達は全員、リビングに居るから残りの気配は二階に1人だけ存在する。

「おっ、ココだな」

確か、前までは空部屋だった筈なのに誰かが居る気配がする。

多分だがこの部屋に宛がわれたのだろう。

ゆっくりと扉を開けて中を確認する。

部屋の中のベットの上に誰かが横になって眠っていた。

どうやら間違いではないようだ。

静かに部屋に入りベットに近付き、ベットの中身を確認する。

「うお」

長い黒髪を扇状に広げ、静かに寝息を立てて眠っている。

白い肌、黒い着物、幼子の様な童貞顔。

本当に俺と互角に渡り合えるだけの實力を持っている人物には到底  
思えない。

少しの間、その美しい美貌に視線を離せなかった。

「何？」

「うわっ!？」

微動だもせず瞳も閉じた状態で俺に話し掛けてくる。

急な事で流石に俺も驚いてしまう。

話し掛けてきたルツエは、静かに瞳を開かせ俺を見てくる。

「・・・」

「えつと〜・・・」

無言の威圧を掛けてくるルツェに俺はどう応えて言いか迷ってしま  
う。

そもそも驚かそうと思って侵入したのに即行バレルとは思わなかつ  
た。

まっ、最終的には2人で話がしたかったから結果オーライなのだが。

「少し・・・話をさせてくれないか？」

「・・・んっ」

一言の頷きの言葉を発して上半身を持ち上げ、俺の方に体を向ける。

真紅の双瞳が俺の顔を映し出す。

さて、こっからは真面目モードと行きますか。

「一つ・・・訊いて良い？」

「うえっ!?!? おっおお、大丈夫だ」

俺から質問しようと思った瞬間、逆に質問されてしまって更に驚く。  
本当は色々と訊きたかったが・・・流石に俺だけ聞くんのはフェ  
アーじゃないよな。

「お前の実力、何処で身につけた？」

「ッ！？」

確信を突いた質問に俺の心臓はドキッとしてしまっ。何でそんな事を聞いてくるだっ！？

「永遠神剣で加護されるのは身体強化及び感覚強化だけだった筈。戦闘経験までは蓄積継承されるものでは無い筈だ」

「なっ！？」

そのルツエの言葉に俺は驚く。

俺は『永遠神剣』には《力》を与える位しか教えてないのに、詳しい事までも教えた覚えはない。

何でルツエはそこまで『永遠神剣』の事を詳しく知ってるんだ。

それも、俺の実力までも見抜くなんて・・・コイツ何者だ？

「戦闘経験は神剣に出会う前に何かをしていた・・・イヤ、あの間合いの戦いから見て刀剣の類か？」

「・・・」

コイツ、マジ何者だ？  
たったアレだけの戦闘でココまで見抜けるものなのか？  
だったら

「ルツエ、お前も刀剣の類の武器を使ってたな？」

「うん。五本ほど」

素直だなオイ。

しかも五本とは多いな。

「今は手持ちには無いけどね」っと苦笑するルツエ。

俺の武器は部屋に置いているから、今は手持ちには無い。

「確かに俺はこの世界に来る前に、少し色々と戦っていた。これで満足か？」

「んっ」

「なら俺も質問させてもらっつ。お前は、彼女等　スピリットをど  
う思っている？」

これはアズマリアからルツエに訊いてくれと頼まれた質問だ。  
ルツエがスピリットを気持ち悪いとか言った瞬間、俺は我慢できず  
に殴り飛ばすだろう。

例え強力な人物で、仲間になってくれると言ってもスピリットを良  
く思わなければ意味が無い。

アズマリアの理想を叶える為に！

ルツエは、最初はキョトンとした表情で俺を見詰て、次は少し含み  
がある笑みを見せる。

「気色悪い。死体が残らず、何処で産まれて来るか判らない存在な  
んて」

「ッ！！ テメェッって、本気で言つても思った？」 ツ!？」

最初の言葉を訊いて俺の脳内が熱くなり怒鳴り散らす為に声を発そ  
うとしようとした瞬間、ルツエの言葉で遮られる。

そして、次に見たのはギラギラと怒りを露にした怒気の瞳。

怒気を孕んだ瞳を見た俺は、思わず息を飲んでしまう。

「彼女等は今、ココで、確かに命を持ち生きている。そして彼女等  
は自由に生きる権利があり、誰かに迫害される理由なの一切無い。  
もし、彼女等スピリットが理不尽に打ちのめされているのなら、俺  
は決して許さず切り捨てるだろう」

「・・・」

その決意の言葉と、全てを射抜く程の眼光が俺を射抜く。良かった。ルツエは彼女等達を良く思っていることに安堵の溜息を漏らす。

でも、まだ質問は終わっていない。

「じゃっ、次の質問していいか？」

「構わない」

「なら、ルツエから感じられる《力》は何だ？」

「？」

可愛らしく首をコテツと傾け不思議そうな表情をする。

それから瞳を閉じて何かを思考して数秒後、瞳らを開かせる。

「レンって 魔法って信じる？」

「はっ？」

何言ってやがるコイツは。

魔法？。そんなファンタジック・・・いや永遠神剣もどつちかと言  
うとファンタジーの分類か。魔法使うし。  
魔法って事は

「チツチラホイホイで何でも叶えられるアレか？」

「どつちかと言つと神剣が使う魔法だね」

俺とルツエの間に挟んだ場所にモクモクと俺が想像した光景が流れる。

女の子がフリフリのドレスを着て、ヘンテコステッキを持って振るシーン。

それを互いに見てルツエは否定する。

「魔法って今イメージ出来ないんだが」

「まっ証拠は追々、見せるとして。多分、レンが感じた《力》は魔法を使う機関の部分だと思う。レンの永遠神剣が気付いたのかな？」

「『ッ!?!』」

微笑んだ笑みで神剣《断罪》を見詰るルツエに、俺と断罪は驚く。俺は一度たりとも『断罪が』なんて言っていないぞ。間違いない。ルツエは

「知ってるんだな？」

永遠神剣の事を知ってやがる。それも深い部分まで。

「まっ、一般人より少し上ぐらいには・・・」

「上ねえ・・・」

もしかしたら俺より知ってんじゃないか？

やっぱし、ルツエは得体の知れない何かを感じるな。

「そんなに睨んでも何も無いよ？」

「判らないぜ。こっ、眼を光らせてたら何かを言い出してくれるかもしれないねえ」

「クスクス」

けっ、軽く受け流しやがった。  
まあ、ルツエがスピリットを迫害もしないし、腕が立つし性格も悪くも無い。  
大丈夫だろう。

「まあ、何だ。改めて宜しくなルツエ」

「品調べはもういいの？」

「やっぱりバレてたか」

「フフフツ。此方も宜しくねレン」

俺達は強く握手を交わす。

これでやっと俺達は信頼できる仲間となった。

「ねえ」

「何だ？」

「どうやってココまで来たの？」

「そりゃ裏口から侵入してえ」

「何で普通に入らないのさ？」

「俺のキャラじゃない」

「意味、判らないよ」

## 006話

密かにレンとルツエの親睦を深めた翌日。

朝日も上がっていない時刻、第二詰所の周辺は朝霧によって視界が悪く状態。

そんな誰もが夢の中に居る時刻に黒髪紅眼のルツエが1人だけ詰所から出てきて空を見上げていた。

霧深い林を1人で歩き、アル場所に辿り着いた。

木々が人工的に切られて広くスペースをとっている場所だった。

「スウゥ……フウゥ……」

軽い深呼吸をして両手を合わせ瞳を閉じる。

すると両手が光輝き、軽い疾風が発生しだした。

「咸卦法」

それを呟いた瞬間、両手の輝きが一体化してルツエの全身を纏い光りだす。

『シュンタクシス・アンテイケイメノイン 気と魔力の合一』。

反発しあう魔力と気力を融合させる事で強力な力を生み出す高難度技法の一つである。

ルツエが嘗て白風と呼ばれていた時代に、共に戦った戦友である『ガトウ』から教わった技法である。

当初は最強に近い《力》を持っていた為、覚える気がなかった。

しかし、今は見る影の無いほどに弱くなったルツエは『咸卦法』を覚える事にした。覚える事には出来ている。今は出力の調整など細かな部分を修行をしていた。時には緩やかに放出させ、次に激しく放出させてバランスを整える。戦友ガトウに比べれば悲惨な出来だが、修行を開始して一年も経たずにココまで出来るのは圧倒的なポテンシャルを持っているからだ。そうでなければ一年経たずに魔力と気力を融合させる事など出来る筈がない。

「ふう〜〜〜・・・」

精神を落ち着かせ、自身に纏っている咸卦法を安定化させていく。それが数分過ぎた後、纏っていた咸卦法を解除してルツエは次の修行に入った。

両足の太股に装備したホルスターから二挺の拳銃を取り出す。

「ハッ！」

拳銃を水平に前に突き出し、気合を入れると拳銃に《断罪の剣》エンシス・エクセクエンが出現させた。

しかし、本来なら刃状の形に成る筈なのだが歪な形状でボロボロと崩れ落ちそうな出来だった。

拳銃での接近戦で打撃だけではなく、斬撃系統の技が欲しかったルツエは『エヴァ』の魔法を参考に作り出した。

だが、独学による自己流の為なのか今一形にはならなかった。

刃にしては崩れ、また作っては崩れての繰り返す。それを何十回も繰り返した。

朝日が上がり、気付いたら周囲は明るくなっていた。

「今日はココまでにするか」

今日も《断罪の剣》が形状維持できなかった事に溜息を漏らしながら二挺の拳銃をホルスターに仕舞う。

空は昨日と同じく晴天で青々しく綺麗に輝いていた。

その綺麗な空を見上げた後、ゆっくりと第二詰所に戻っていった。

日本など機械技術が発達した国の都市は自然が少なく、酸素も以外にも汚れている。

それに引換え、ここは空気が清んでて良い気分で深呼吸が出来る。都会などでは絶対に味わえない物だ。

そうとしている内に第二詰所に戻ってきたルツエは静かに玄関の扉を開かせ入る。

すると、バツタリと人間嫌いの『クーリィ・ブラックスピリット』と鉢合わせになってしまった。

ルツエも流石にどう反応したらいいか判らず、少し困る。

クーリィも同じ心境なのか、どう態様していいのか判らず慌てている。

そして第一声は

「じゃっ、邪魔です。どいて下さい」

「んっ、悪かったな」

素直に謝り、道を譲るルツエ。

その態度にクーリイは、顔を下に向けたまま詰所から出て行った。出て行ったクーリイを見届けながら詰所に入る。

リビングに向かってしていると『ミレル・グリーンスピリット』と途中で出会った。

「お早いですねえ、エトランジエ様あ」

「お早うミレル」

朝からホノボノした感じの口調で挨拶してくる緑スピのミレル。

目をシヨボシヨボさせながら、一緒にリビングに向かった。

リビングに到着すると良い匂いが鼻に刺した、ミレルと共にお腹の虫を鳴らす。

急に鳴ってしまった事にルツエは、少し頬を赤く染めながらリビングに入る。

「お早う。アルマ、フレイ」

リビングに入って最初に眼に入った光景は、燃える様な真赤な髪を靡かせる2人が食器をテーブルに広げて朝食の準備をしていた。準備に専念しているためか入ってきたルツエやミレルに気が付いていない様子だ。

一様は挨拶をする為に声を掛けるルツエ。

その挨拶を聞いた2人は、手を一旦止めて体制を整えてルツエの方に向く。

「お早う御座います」

「御座います」

アルマは真面目に挨拶を返し。

フレイは短めに挨拶を返し、朝食の準備を続ける。

すると、奥の調理場から短い青髪を揺らしてエプロン姿のフレエーンが出てきた。

出てきたフレエーンはルツエ達の姿を気付いて挨拶をする。

「お早う御座います。昨日は御緩りとお休みになれましたか？」

「ああ。それと、そこまで畏まらなくても良いよ」

「そういゆ訳にはいきません」

「はあ〜・・・」

フレエーンは、今まで会った事の無いほど生真面目だ。

畏まらなくてもよいと、名前で呼んでと言っても融通が利かずに一向に駄目と返ってくる。

その生真面目がフレエーンの良い所であり、柔軟性が悪い部分でもある。

「もう少しで朝食の準備が出来ますので席に付いて待ってて下さい」

「判った」

「では。アルマ、フレイ、出来た料理をテーブルに運びますので手伝えて下さい」

「はい」

ルツエは言われた通りに指定されている席に座り、その隣にミレルが座る。

座ったミレルは、だらしくテーブルに身を置きぐたりとしている。まだ眠いのか、少しウトウトとしながら偶に寝息が聞える。

眠そうにウトウトしているミレルを見て微笑むルツエ。

するとリビングに誰かが入ってきた。

「ふあ〜、眠い〜」

「ぐう〜」

フレーンと同じく青々しい髪を靡かせる少年組の2人の青スピがリビングに入ってきた。

普段は元気潑刺なアミアは欠伸をして目を擦り、レムは瞼を閉じた状態でフラフラとしている。アミアに引つ張られながら一緒に席に座るレム。

「お早う2人とも」

「お早う〜」

「ZZZZ〜」

挨拶をするが今一判っておらず生返事に返すアミアだが、レムは完全に夢の中に入っていた。

それを見て微笑ましく見詰ながら朝食の準備を待っていると、自分の手元に誰かが御茶を置いてくれた。

誰の手かと確認してみる。それはアルマ・レットスピリットだった。

「御茶です」

「ありがとうアルマ」

「いえ」

軽く返事を返した後、調理場に戻って行った。

渡された御茶を軽く口に含み味を確認する。どうやら緑茶のようだ。緑茶？らしき御茶の苦味が未だに眠かった眠気を飛ばしてくれ、意識がハッキリしてくる。

美味しく緑茶を楽しんでいるとシュレニア・グリーンスピリットとゼクタアニ・グリーンスピリットの2人が入って来た。

シュレニアは困った顔をしながらも無言でお辞儀して、ゼクタアニは顔をソツポ向けて自身の席に座る。

ゼクタアニはどうやら俺・人間を嫌っている。

勿論、シュレニアもどっちかと言うと嫌いらしい。

「ニア、ゼク、彼方達も来ていましたか」

「お早うフレエーン姉え」

「フレエ姉え、ご飯まだ？」

「もっ少しよ」

ルツエには一切挨拶をしない2人は、調理場から顔を出したフレエーンに挨拶をする。

それを見てルツエは苦笑しながら生温くなった緑茶を飲む。調理された料理がテーブルを並べだした頃にクーリイが外から帰ってきて席に着く。

料理が全てテーブルに並べ終え、第二詰所の全員が揃った。

「皆、席に着きましたね。では、頂きましょう」

そのフレエーン言葉と共に皆は準備された料理を食べだす。

しかし、ルツエだけは食べだす事無く両手を合わせ瞼を閉じる。

日本人の食卓では当たり前前行儀作法。

だが、此処は異世界であり『頂きます』の作法など有る訳なく。皆が手を止めてルツエに視線を向ける。

何の動作なのか判らないルツエ以外のスピリット達。

最初に聞いたのは第二詰所のリーダー格でもあるフレエーンだった。

「あの、それは一体何の作法なのですか？」

「コレか？」

呼び掛けられたルツエは片目だけ開かせフレインに視線を向ける。質問されたこの作法の意味を説明する。

「命の糧となつてくれる料理と料理をしてくれた者、その両方を感じ謝の気持ちを籠めた作法だよ」

「感謝の気持ちですか？」

「そう」

説明終わるとルツエは軽く『頂きます』と呟いた後、食事を開始する。

皆は呆然としながらも、気を取り直して食事を続ける。

それから朝食を終え、皆は食器などを片付け調練場に向かう。話によると第二詰所の他にもスピリットが居るらしく挨拶を兼ねて訓練するそうだ。

調練場に向かっている時すら会話など一切無く。ルツエは飄々とした態度で調練場に向かう。

到着すると、既に誰かが数名居て訓練を開始していた。

「おうレン。昨日ぶり」

「おっ来たかルツエ」

壁に凭れて欠伸をかきながら挨拶をしてくるレン。  
その横には青髪メイドのスピリットが立っていた。

「えっと、誰？」

「私はリリア・ブルースピリットです」

「宜しく」

一様は軽く返事を返すルツエ。

だが、ルツエは何かを感じたのだ。

この女は何か嫌な予感がすると。  
スピリット

ルツエは逃げるように視線を模擬戦している2人のスピリットに向ける。

緑スピと赤スピの2人の永遠神剣が激突して火花を散らしている。  
そこで不思議なことに気が付く。

2人の永遠神剣の形状が非常に変わっているのだ。

「えええいつ!!」

「はっ!!」

緑スピの槍は《巴形》の薙刀であり異常なまでに長い。そして、赤スピの双剣は左右にハルバートの槍斧で出来ている物だった。

互いの神剣が火花を散らし、金属音の調練場全体に響く。

赤スピの一撃で緑スピが吹き飛ばされるように後退して何も無い所に大きく神剣を振る。

その瞬間、薙刀の永遠神剣はカチカチと何かが外れる音が聞えた。簡単に言えば連結剣の槍バージョンと言えば良いのだろうか。

刀身だけではなく柄すらも分裂して最終的には鞭の様に撓り、蛇のように赤スピに襲い掛かる。

襲い掛かるその《連結槍》を赤スピは冷静に弾く。しかし、弾いた剣先は意思を持ったようにクネリと撓り赤スピの後頭部に襲い掛かる。

双剣では対処できない攻撃、だが　カチッ　何かが外れる音が聞えた。

その瞬間に一つに繋がっていた双剣が分裂して片手持ちの斧に変形して、後頭部に襲い掛かる剣先を弾く。

左右に持った片手斧を軽やかに扱い構える。

「そこまでですよ2人とも」

「……………」

リリアと名乗る青スピの停止の言葉に模擬戦していた2人のスピリットは無言で構えを解く。

その後は皆一列に並びルツェとレンも並んだ皆の前に立つ。

「では、皆さん。もう一度、紹介する事になりますが新しく私達と共に戦って下さるエトランジエ《シュヴァルツェ》様です。皆さん粗相の無いように」

「……………」

リリス以外のスピリット達は無言で見詰返す。

レンは皆の態度に苦笑して、ルツェは無言で返している。

「始めましてエトランジエ様。私はテル・グリーンスピリットです」

「リネル・レットスピリットです。宜しく御願いますエトランジエ様」

先程、模擬戦していた赤と緑のスピガルツェに挨拶をする。

レンからの話では彼女等は第一詰所で、一緒に住んでいるようだ。

軽めの挨拶をすんだ後、皆は各自に訓練をする為に二人一組のペア

を組んで模擬戦を開始する。

ルツエもレンと模擬戦をしようとして誘おうとした時、誰かに呼び止められた。

後ろに振向くルツエの視線に最初に入ったのは青髪。

第二詰所の纏め役であるフレエーンだった。

「宜しいですかエトランジエ様」

「……………エトランジエは2人居るんだけど？」

「……………では、シユヴァルツエ様」

「長い。ルツエだ」

「いえ、その様な「y」それ以外の呼び方は受け付けない」……  
ルツエ様」

「なに？」

「私と模擬戦をして頂けませんですか？」

第二詰所のリーダー格であるフレエーン・ブルースピリットの模擬

戦の申し込み。

その会話を他のスピリット達は模擬戦なのしながら聞き耳を立てていた。

勿論、その会話を聞き耳を立てているのはスピリットだけではなく、もう1人のエトランジエであるレンもそうだった。

ルツエは瞳を閉じて数秒だけ思考した後、瞼を開ける。

「良いよ」

「有難う御座います」

ルツエの返事を聞いたフレエーンは軽くお辞儀をする。

返事を聞いた他の者達は一齐に調練場の中央の場所を開かせた。

フレエーンは己の神剣《渦潮》を持って開けた中央に移動、その後をルツエも追う。

「勝利条件は相手に《決定打》か《降参》させた方が勝ちで宜しいですね？」

「いいよ」

足の爪先を地面にコンコンと蹴りながらホルスターに仕舞っている

《ベレッタM92》一丁だけ取り出す。

それ行動をみたフレエーンは眉を顰めて不機嫌を露にする。

「何故、一個だけなのですか？」

「えっ？」

謁見の間にてレンとの模擬戦を見ているフレインにとっては二つとも出して模擬戦してくれるのだと思っていた。

しかし、取り出したのは二丁だけ。

その瞬間、調練場が尋常ではない程に張り詰めた空気が発生した。

ルツエのその態度を見たフレインは『一個だけでも充分に戦える』と言っていると思ったのだ。

即ち、手加減しても勝てると言われているようだったのだ。

それを見たフレインは癪に触った。

「謁見の間にて二つとも使っていたではありませんか。それとも、私程度では一個だけでも充分と仰っているのですか？」

「……………ああ、コレ？」

完全に売り言葉を発するフレインにルツエは自身が持っている拳銃を交互に見詰て何かを納得した。

苦笑しながら拳銃をフレインに構える。

「二個目　出させてみたら？」

「ッー！」

その言葉を発した瞬間に張り詰めていた空気が弾けて、フレエーンはハイロウを頭上に展開して翼に変えて一気にルツエに突撃する。頭に血が上っているとは言え、嘗てはスピリット隊副隊長を務めていただけはあり思考は冷静だった。

ルツエも右手に持った拳銃を発砲させる。

永遠神剣の能力にて異常なまでに上げられた身体能力を持つスピリットにとつて銃弾など止まって見えていた。

止まって見えている銃弾をフレエーンは最小限の回避行動で避けてルツエに襲い掛かる。

横一闪の構えをしたフレエーン。それを見たルツエも防御体勢を取ろうとした瞬間、フレエーンの姿が掻き消した。

一瞬にして姿を消したフレエーンにルツエは慌てる事無く上を見上げる。

そこには上段の構えで一気に急落下してくるフレエーンの姿だった。ルツエは縦一闪の攻撃を身体を捻り軽やかに避け、その捻った状態からフレエーンの腹部に蹴りを入れる。

しかし、その蹴りをフレエーンは鞘を盾にして防ぎ後ろに後退する。その後退するフレエーンに何発もの銃弾は連射する。

何発もの連射された弾丸をフレエーンは全てを切り捨てた。弾丸を切り捨てられたのにルツエは一切反応無く、今度はルツエが攻める為にフレエーンに向かって駆ける。

フレエーンも切り捨て終えた後に一気に向かって来るルツエに襲い掛かる。

右下段から切り上げる一撃を放つフレエーンに、ルツエは銃把グリッブの尻

で弾く。

だが、フレーンは弾かれた反動を利用してその場で一回転して、今度は左からの横一文字斬りを放つ。

しかし、その一文字斬りをルツエは神剣の背に銃弾を叩き込み強制的に止める。

神剣には傷は無いものの振動がフレーンの手に伝わり、一時的だが手が痺れる。

その一瞬の手の痺れで動きが鈍ったフレーンに身体を密着させるルツエ。

そして、フレーンの腹部に自身の全体重を乗せた重い体当たりを叩き込んだ。

他所から見たら、急にフレーンが吹き飛んだ様にも見られる。

しかし、その体当たりを受けたフレーンにとっては想像していなかった一撃だった。

地面に着地して腹部を押さえながらも前方を見てルツエの次の行動に備えようとした。

だが、視線の先にはルツエの姿が無かった。

『カチャ』。後頭部に冷たい感触が頭に当たる。

「・・・参りました」

「・・・」

フレーンの頭に当てていた拳銃を除ける。

無言で拳銃をホルスターに仕舞って調練場の隅に向かう。

周囲に居たスピリット達は仰天していた。

その圧倒的なまでの実力に驚き、背筋にゾゾツと恐怖も感じた。

一瞬の出来事だったがルツエの実力を知ったスピリット達。  
レンもまたその実力に戦慄が走っていた。

## 007話（前書き）

長い間、お待たせしてすみませんでした。

何分、此方も色々としていて筆記する暇がなくて投降することが出来ませんでした。

最近では、携帯折れるし。

PCが壊れるし。

骨が折れるし。

テーブルが折れたりしました。

それでも頑張って投降しようと思います。

あっそうそう、何か今更感一杯なんです。PSP版『永遠のアセリア』が来年の一月に発売するそうですよ。サブスピにカットインがあるようです。

絵柄は・・・誰だよと思うぐらい違います。書いている人が違うみたいです。

皆さんは買いますか？

自分は買います。

## 007話

### 《イースペリア第一詰所》

第一詰所のリビングで俺は今、ルツエと交えて会話をして楽しんでいた。

魔法の事や魔法世界の事、色々な話をして楽しんでいた。

えっ、鍛錬はどうしたって？

逃げ出したに決まってるだろ。

「へえ、そのナギって奴は強かったんだな」

「いや、あれはバグだ」

話を訊く限りじゃメッサ強いらしい。

他にも筋肉モリモリのオッサン、謎めいたローブ野郎、他にも神鳴流って流派を使う侍。

またも謎めいたジジイ口調の子供、啜え煙草の似合うハードボイルドダンディー。

どれもこれも最強クラスの化物揃いのメンバー『紅き翼』の元一員だったルツエ。

どんだけ強いんだよ。

「何で元なんだ？」

「色々とあつてね」

苦笑しながら窓から差し込む日差しを眺める。  
その態度を見た俺は急いで謝った。

「すまねえ。訊いちゃ悪かった話題か？」

「えっ？ あっいや、そうじゃないんだけどね」

どうやら触れちゃいけないNGワードだったらしい。  
ここら辺は触れずに話すか。

ルツエは未だに苦笑しながらリアが準備してくれた紅茶を一口含  
む。

「でも、良いの。こんな所で油売ってて？」

「構わない」「構いません」

傍で一緒に紅茶を飲んで会話を楽しんでいるリアと声が八毛る。  
そもそも、調練を最初に逃げ出したのはリアだ。  
俺もそれに釣られてルツエと一緒に抜け出したんだが。

「それよりも。もっとルツエ様のお話を聞かせて下さいますか？」

「そうそう。訓練よりも為になるぜ」

「面白い？」

「」「面白くない」

「はいはい」

またしても苦笑するルツエ。  
訊きたい話題は色々ある。

「では、ルツエ様。質問宜しいですか？」

「良いよ」

「では僭越ながら。レン様から聞いた話では刀剣の類を扱っていたと訊いておりますが」

キィ！！

凄まじい眼光で俺を睨んでくるルツエ。

眼光だけでも殺せそうな視線を明後日の方向に向ける回避する。

いや、俺も最初は黙ってたんだぜ？

でもリリアの話術にはまっつて・・・。

少し睨まれた後、少し溜息を漏らして話します。

「・・・うん。使ってたね」

「どの様な刀剣だったのですか？」

「少なくとも永遠神剣じゃなかったのは確かだね」

簡単に説明を聞くと大きな牙の様な剣だったそうだった。

多数の能力を持って、現状に応じて色々と変化できるそうだった。

見てみたいものだ。

「まっ、今は次世代の子に継承されてるけどね」

「継承？ 誰かに渡したのか？」

「正確には【剣】がその子を次世代の担い手と選んだから」

剣が選んだ。

それって俺らが持っている永遠神剣と同じじゃないか。違う所と言ったら、契約者が死なない限り契約は解除されたい所か。

「不思議な剣なのですね」

「一瞬でも弱気を見せたら殺されそうだけどね」

「物騒な剣だなオイ」

思わず苦笑いする俺。

永遠神剣にも契約者に干渉して精神を乗っ取るらしい。でも、殺すことは無いだろう。

「他にも有ると聞いてますが」

「教える気は無いよ」

「ケチなのですね」

「おいおい」

「アハハハッ」

エトランジエであるルツエに凄く無礼な言葉遣いを平然と言ってしまったりア。

俺は呆れ顔になり、ルツエは素直に笑って流している。

ルツエって以外にも懐が大きい。

大抵の罵声でも普通に笑顔で流している。

「残りの剣って誰かが継承されてないのか？」

「残りの剣達は機嫌が悪くてね、俺以外の担い手を中々決めなくて」

「それだけルツエ様の事を好かれていますね」

「いや、アレは好かれているよりも俺以外使える人間が居ないのだろっ」

「どんだけ気難しいんだ？」

「やんちゃなんだけどね」

アハハツと笑って紅茶を飲む。  
俺も少し冷めてしまった残り紅茶を一気に飲む。  
いやあゝ冷えても美味しい紅茶だ。  
流石はリリアが淹れた紅茶だけはある。

「美味しいね」

「有難う御座います」

丁寧にお辞儀する。  
つてか、紅茶が上手くなったのは自分の為なんだろうな。  
他にもアズマリアにも淹れるから必然と上手になるんだろうな。

「そう言えば第一詰所の他の子たちは？」

「買物に行かせています」

テルとリネルの2人の事だろう。  
リネルは生真面目で冷静沈着で、そのテルは真逆の天真爛漫で元氣  
潑刺。

その間で真面目で時に不真面目なりリネ。  
何だろう。妙にバランスが取れてて怖い。

「ふうくん。あの子達って妙な神剣使ってるよね？」

「ああアレか？」

「確かに私を含めて第一詰所に居る私達スピリットは、特別な神剣を使っています」

そうなんだよな。

テルの槍は、刀身の先から柄頭つかがしらまで分裂できる連結槍。

リネルの双剣は、柄の中央が分裂して二刀流に出来る。

初めて模擬戦した相手がテルやリネルだったから、それが普通だと思っていた。

だが、実際は全然普通で形状変化の神剣は一般には無い。

「特殊ねえ」

「・・・」

一瞬だがルツエの眼が鋭くなった。

本当に一瞬だった為に見間違えかと思っただが・・・。

普段はゆったりとした態度を見せているが、偶に深く何かを考えている素振りが見られる。

仲間としては頼もしいが、敵だと思つとゾツとする。

エトランジェであるルツエ様のお話は新鮮なものばかり。訊いているだけでワクワクが止まりません。まるで童話にでも出てきそうなお話しがルツエ様の御口から話される。

これは後々、アズマリア様に教えしなくては。

「では、次の質問を宜しいですか？」

「話せる部分ならね」

「判りました」

中々、本音部分は話して下さらないルツエ様。

他にも隠している部分も有るようですが……。

しかし、少しずつですが聞き出せる事は聞き出さねば。

私にはアズマリア様から直々に命令を命じられている。

それは『シュヴァルツェとは一体何者なのかを密かに調べる』つと  
言う命令。

だから、さり気無く聞き出す。

「ルツエ様が本気になられたら、どれ程強いのですか？」

「本気ねえ〜・・・多分だけどエトランジェ弱程度だと思うよ」

「本当ですか？」

「うん」

笑顔で返事を返してくるルツエ様。

しかし、私にはそうと思わない。

彼、ルツエ様は何か別の【力】を隠し持っている気配がする。  
それを聞き出さねば・・・。

「無理だよ」

「ッ!？」

その言葉を発されたルツエ様に視線を向ける。

未だにニコニコと微笑んだ笑みを見せるルツエ様に私は、言い知れない恐怖を感じた。

まるで全てを見透かしている様な感じだ。

「色々と探ってみてるけど・・・今は無理だよ」

「全て見過ごしているよ?」

「やあ」

そう言って私が淹れた紅茶を飲むルツエ様。

本当に何者なのだろうか？

レン達との楽しい会話が一段落して俺は第二詰所に帰る途中だった。  
あのリリアって子はずっと俺の事を探っていた。  
まっアズマリアの命令だからな。

「お帰り」

「チュッ」

視線を右肩に向けると薄茶色の小鳥が肩の上に乗っていた。  
この子は俺の能力『ザ・ビースト獣王神』で呼び出した偵察用の小鳥。

流石のリリアやアズマリアと言えども小鳥が盗み聞きしているとは思いません。

他にも各地　主に四神剣　に偵察の獣達を散らばしている。時期に情報が入ってくるだろ。

「さて、帰って何をしようか」

未だに獣達からの情報が届くのは後だからな。ならば修行して強くならねばなるまい。

最終的に相手をするのはロウ・エターナルなのだから。

今の状態でエターナルなど戦っても百%負けるのは見えている。

せめて獣王神ザ・ビーストの能力が全快すれば互角まで戦えるのだが。

今の状況を詳しく分析しながら今後の事を考えていると、誰かの声が聞えた。

誰かが居るのかと思って声のする場所に向かう。

小さな小道を歩いて林を抜けると二つの影が見えた。

「あれは、シユレニアとレムか」

互いに身丈が低い、緑色と青色の髪を揺らしながら神剣を振るっていた。

だが激しい金属音は一切無く、擦れるような独特な音を出していた。独特な音を出して二人は楽しく会話をしている。

「見事だ。紙一重で剣戟を互い逸らし合っている」

剣戟を激突させる事無く逸らして往なす。

これ程の技術がああ歳で出来るとは、たいした才能だ。

流石のこの場所だと会話が聞き取れないので木の上に登って様子見をする。

「あの新しく入ってきたエトランジェ様。どう思う？」

「奇妙、変人、奇人」

「判る気がする」

「(酷い言われようだ)」

短い青色ポニテをゆさゆさと揺らしなが新しく入ったエトランジェシュヴァルツェの事を勝手に評価するレム。

そして、そのレムの勝手な評価に同意するシュレニア。

傍で本人が聞いているなど露知らず好き勝手言っている。

だが、一々そんなことで怒る事ではない。

子供は純粹に物事を見ている。あの評価こそが皆が抱いている思いなのだろう。

「(まあ、他所から見たら、そう見えるのだろう)・・・」

「でも……」

「でも？」

「悪い人じゃない」

「そう？ 目元とか怖いんだけど」

そこまで俺の目付きは怖いのだろうか？  
レン辺りに聞いてみるか。

しかし、『悪い人じゃない』つか。

何処をどう見たら《悪人》じゃないと確信できるのか俺には分からない。

「目付きは……怖いけど」

「（怖いのか）」

「でも、優しい雰囲気だったから」

「そうかなあ？」

秀困気。

動物か何かの本能が優しさを感じたってところか。  
まっ、嫌われていないだけマシか。

「他の人間よりかはマシ」

「それは判る」

これ以上は盗み聞きは悪いと思った俺は、一瞬にして2人の元から姿を消した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4324v/>

---

獣の王者『世界を旅する・アセリア編』

2011年10月24日12時01分発行